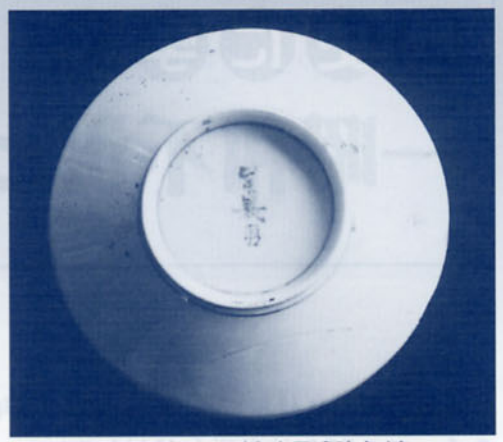
有72…この数字は何？


高台内に番号のある皿（山小屋遺跡出土）

アメリカのある年報の報告によれば、20世紀の推定戦死者数は１億780万人といいます。日本人にとって最後の戦争となった第２次世界大戦の敗戦からすでに56年が過ぎ、もはや戦争を経験した人は少なくなってきました。しかし、戦争を忘れてしまっては21世紀の未来もありません。終戦直後の混乱期のありさまはよく耳にするところですが、有田でも進駐軍が来るというので戦争に関わった資料や製品はすべて破棄するように命令が下され、ある窯元では書類を窯で２，３昼夜かけて焼却したといいます。この間の有田の歴史は現在幸運にも残された資料（例えば陶貨や手榴弾、陶製水筒などの製品）で垣間見ることができますが、文字として当時の様子を伝えるものは多くありません。

最近になって、各地の遺跡などから焼き物の高台内に「有　25」などという銘を書いたものが出土し、これは一体何を意味するのかという問い合わせが相次ぎました。この数字は昭和16年、当時の商工省が陶磁器工業整備要綱を示達し、陶磁器の計画生産と企業整備が行われた際、各陶磁器産地で企業の合同化が進められた時に使用されたものです。有田でも工業組合に窯元が集められ、くじ引きによって番号が決められたそうです。１番を引いたのは江上栄吾さん。当時稗古場で主に花瓶を焼いていて、１番という数字を父栄吾さんが大変喜んでいたということを息子の江上正勝さん（赤坂）が記憶されていました。

この他聞き取り調査によって現在までわかっているのは「有　12」を梶貞窯と福丈窯が、「有　50」を江房製陶所が、「有　75」を瀬戸口富右衛門窯が使用していたのではないかということです。この企業合同は、戦争が激しくなり物資が不足してきたことによります。昭和16年11月20日付け、佐賀新聞の記事によれば「燃料（石炭）の配給減と輸出杜絶で、一大動揺の陶磁器界。政府案によれば産額500万円陶器王国の本県陶器の浮沈に関することなので、佐藤県商工課長は東京・名古屋と同問題打ち合わせのため出張。有田焼を中心に業者150名の陶器業者の企業合同並びに今後の方針について協議することとなった」とあります。この150の業者は佐賀県全体と捉えたほうがいいようで、ちなみに塩田や嬉野・吉田の窯元では「肥　25」という肥前の肥の銘を入れており、有田とははっきり区別していたようです。

当然のことながら、瀬戸や多治見などの他産地でも同様の製品がつくられました。このように記号が付けられた陶磁器は、昭和16年から20年までに生産された製品であり、番号によって生産された産地、窯元が特定できる貴重な資料といえます。（尾崎）

めも

戦時中の有田や陶磁器生産については、「有田町史　陶業編Ⅱ」、三井弘三著「概説　近代陶業史」、「西日本文化　320」に詳しくあります。また、「証言私の昭和史第五巻」には当時の関係者として清水時一さんや竹重米雄さんの回想が語られています。本文にも述べたとおり、この当時の資料はわずかです。番号が示す窯元やその他戦時中に関わることをご存じの方はぜひご連絡ください。

季刊
皿山夏 No.50
有田町歴史民俗資料館・館報

歴史に学ぶ

―昭和不況に有田はどう対応したか―

（前文）

景気循環論には、ジュグラーの10周年説、ゴンドラチェフの50年波動説などがあり、シュンペーターは技術革新に伴う投資拡大が景気を浮揚すると説いている。いずれにしても供給と需要のバランスが崩れたときに、不況となる。

有田の歴史を振り返ると、①廃藩置県で藩窯制度が崩壊したとき　②昭和恐慌　③石油危機後の恐慌　④1990年代に始まるバブル崩壊からの不況がある。

昭和恐慌は、1929年（昭和4）10月ニューヨークでの株式大暴落を引き金に発生した。倒産、失業者の増加、賃金引き下げとなり、ヨーロッパでは、アメリカからの資金ルートが断たれ大恐慌、日本では米価暴落、生糸の対米輸出ストップで、世界恐慌が拡大していった。

このようなとき、有田ではどうであったか、有田町史をひもといてみたい。

有田の昭和不況

1930年（昭和5）有田の陶磁器業界も、不況がいよいよ深刻化し、中堅企業の倒産、商人の破産、失業者が増加していった。失業者は、職を求めて中国東北部（満州）へ渡航するものや、技能を持った者は、これを機会に製陶家として独立にふみきっていった。

表を見ていただきたい。大正14年と昭和7年を比較すれば、職工数は、8.8%増加しているが、陶磁器生産額は、39.4%減少、その中でも飲食器は46.3%と半減している。

佐賀県陶磁器生産の推移

		大正14年	前年比	昭和7年	大正14年比	昭和9年	昭和7年比
戸数〔戸〕		203	0.4%	243	19.7%	237	△2.5%
職工数〔人〕		2654	△1.6	2888	8.8	3003	3.9
生産額〔千円〕		3712	4.2	2252	△39.4	2286	1.5
内訳	装飾品	558	△5.3	492	△11.9	637	29.5
	飲食器	2626	6.2	1412	△46.3	1810	28.1
	工業用品	58	△27.5	120	206.8	116	△3.4
	碍子	309	0.6	153	△50.5	214	39.8
	玩具その他	151	32.4	75	△50.4	87	16.0

※「有田町史」商業編Ⅱ

不況に対する、行政の動き

有田村議会（昭和5.2.13）の記録によれば、「日本の経済界は揖靡（いび）不振し、村民の疲弊困憊（ひへいこんぱい）甚だしきにより、昭和5年度予算において整理緊縮に意を用いおるも、従来の課税より減税することあらずんば、前途はまことに憂慮堪えざることにして・・」と当時の不況を伺わせている。

当時の行政の動きを見てみよう。

1，昭和5年11月3日、当時の井上佐賀県知事により「第1回窯業振興相談会」が、県庁で開催された。江越米次郎町長、青木甚一郎有田村長、大須賀窯業試験場長、松本静二、手塚嘉十、岩尾卯一、松本栄治、諸隈光四郎、深海龍一、松本台太郎らが出席した。

2，昭和5年12月19日、「第二回窯業振興相談会」が、有田町第一窯業試験場で開催され、県の内務部長万富次郎が議長を務めた。（町史・商業編Ⅱ）

3，昭和6年1月8日、有田焼見本市が、有田小学校で開催され、全国各地ならびに中国東北部（旧満州）から約50名が出席した。その出席者の中から12名を選び、有田焼に対する意見交換が行われた。その内容は、

①ゴム版転写の技術が拙くて乱雑。

②がら模様が悪く、新味がない。

③製造家が有田焼に「ウヌボレ」があって、改良進歩に熱意が乏しい。

④価格の一層の引き下げが必要。

⑤従来、かけ引きが多くて取引が困難であったが、見本市を機会にこの弊害を改めるべきである。

⑥従来の制限入札方法を、公開入札制度に改めること

⑦錦物の生地・絵具・金色が粗悪である。これを改善し、図案も単純化すべし。
⑧愛知・岐阜の製品は運賃が安い。運賃の見直しをすべし。
⑨火鉢に水や金魚の図柄は適当でない。また、「ぶどう」絵も「成り下がる」といって縁起がよくない。
⑩有田焼の図案は、主に山水模様であるが、この図柄は東京方面では歓迎されない。(町史　通史編)

4，昭和6年3月2日、「有田焼振興懇談会」が半井知事の招集で、赤十字社佐賀支部に於いて、深川栄左衛門ほか窯焼き、赤絵屋、商人代表10余名が集まり、次の5ヵ条を中心に討議された。(肥前陶磁史考)

①製品の殆どが、内地向けの一部に止まり、意匠図案等に於いて、世の趣好に順応せざる嫌あり。
②生産費の逓減は価格を低下し、需要を増加せしむるものと認む。その対策如何。
③従来の販売方法は、時勢に添わざるものあり、その改善策は如何。
④販路の開拓拡張を計るは、斯業の進展上尤も必要なりと認む、その方策如何。
⑤以上のほか、斯業の振興を期する適切な方策如何。

当時の不況打開策

不況打開が急務の課題となった有田陶磁業は、次の方途を辿ることとなった。

①生産調整・合理化・コストダウン　②国内の主要都市に於ける精力的な販路拡大　③満州・支那（現在の中国）を中心とした海外市場の開拓　④工業用、電気用陶磁器をはじめ意匠・図案・形状・用途等の新商品開発　⑤佐賀・長崎を含む広域的な組合の団結、組織強化であった。(町史　商業編II)

明けて昭和6年、有田焼業界にブームを巻き起こしたのに「帯止め」がある。

佐賀にご来臨の秩父宮に佐賀市長から、二宮都水が製作した「帯止め」が献上され、翌7年、佐賀県知事より同じく都水作の「帯止め」が、東伏見宮大妃に献上されたのをきっかけに、有田焼の「帯止め」が全国的に流行することとなった。(町史　通史編)

二宮都水さんとその作品（村田都枝子さん提供）

昭和4年ごろ、上幸平から陶山神社方面を見た風景（鶴田周之助さん提供）

当面の課題

福島大学下平尾勲教授は「現代地域論」のなかで、次のように述べている。

①原価計算の重視、在庫管理の徹底。
②（トップが）こまめに取引先を訪問する。
③品質・デザインのよい商品には需要があっており、消費者の意識、ニーズ、行動様式を適切に把握すること、市場性のある商品を作ること。
④それぞれの年代層に応じた商品の開発。
⑤生活を楽しむ食器、ストーリー性、話題性があるものを開発する。
⑥巨大都市周辺の人口密集地への着眼。

「商い」とは厭きないなり

「商い」とは厭きないとも書く。面倒がっては倒産が待っている。経営のトップは企業の健全維持、従業員と家族の生活への配慮、社会貢献という責務がある。

経営者は自社の現状を計数で充分承知しているか自問するのも重要な要素である。

「やきもの」には表情がある。やきものに係わる人の気持ちが伝わってくるものである。また店頭に並べられたやきものを見ると、どのような気持ちで売られようとしているのか伝わってくるものである。

今、有田でやきものに携わる人にとって大切なことは、やきものに自分の気持ちを込めて「相手の心につながる仕事をしているのか」「相手と言葉でつながる仕事をしているのか」を自問自答することであろう。

過去、苦境を乗り越え、先祖が築いた伝統技法を活かし、工・商・政・官・学が一体となって不況打開の策を練るときに来ている。　(久富桃太郎)

(参考文献)「有田町史　政治社会編II、通史編、陶芸編、陶業編II、商業編II」、「肥前陶磁史考」「現代地域論」「炎の里　有田歴史物語」

いよいよ始まります！
「有田の名宝」展

平成８年に開催され、夢と感動を与えた世界・焱の博覧会は平成13年に５周年を迎えます。また、昨年有田地区にある15カ所の博物館・美術館・展示施設が集まって「有田ミュージアムズ連絡会」が発足しました。この焱博５周年と「有田ミュージアムズ連絡会」の発足を記念して、有田地区に所蔵されている代表的な肥前陶磁器を一堂に会した展覧会が、佐賀県立九州陶磁文化館で開催されます。

国宝や佐賀県の重要文化財に指定された陶磁器を始め関連資料まで、約200点を展示します。有田町内にこれほどの名宝が所蔵されているということを、町民のみなさまが改めて誇りに思っていただけるものと思います。ぜひ、ご観覧ください。

◎主　催　「有田の名宝」展実行委員会
◎会　場　佐賀県立九州陶磁文化館
◎会　期　平成13年７月19日（木）～10月14日（日）
　　※月曜日は休館
◎観覧料　大人　500円（300円）
　　大学生　200円（100円）
　　高校生以下及び障害者は無料
　　※（　）内は20名以上の団体

新刊が出ました

このほど「研究紀要　第10号」を刊行しました。今回は昨年開催した企画展「川浪養治（筍谷）」展に関するもので、遺族や教え子の方々にも川浪養治さんの思い出を語ってもらいました。購入ご希望の方は定価1,570円で頒布いたしておりますので、有田町歴史民俗資料館でお求めください。

「写真で残す ふるさと有田」展

移り変わる「ふるさと有田」の自然や暮らしを次世代に残そうと、昨年度町民のみなさまに呼びかけ作品を募集していました。その結果149点の作品が応募されました。有田町文化協会並びに有田町教育委員会で選考しましたが、その基準は次の通りです。

町長賞　田中さんの作品

①50年後には歴史的資料となるもの
②いつまでも残したい有田の風景
③情緒のあるもの、または郷愁を感じさせるもの

その結果、次の方々が入賞されました。

・有田町長賞　田中フミ子さん（大樽）
・有田町教育長賞　金岩　昭夫さん（泉山）
・有田町文化協会賞　野田　源秋さん（戸矢）
・入賞
　原田セツさん（泉山）　松尾雅夫さん（白川）
　田中直良さん（大樽）　石丸種子さん（幸平）
　秀　竹男さん（黒牟田）　小川　武さん（赤坂）
　中村仁子さん（南川原）

この企画は今年度も継続していきます。50年後、100年後の人々があっと驚くような、そんな風景や暮らしを記録し、応募してください。

詳細は
☎43-2678まで

文化協会賞
野田さんの作品

教育長賞
金岩さんの作品

季刊『皿山』
通巻50号（平成13年6月1日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館
〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185